

Abstract

血友病患者における自己受容および等尺性筋力

Proprioception and isometric muscular strength in haemophilic subjects

T. Hilberg, M. Herbsleb, H. H. W. Gabriel, D. Jeschke and W. Schramm

血友病は関節内出血により特徴づけられ、しばしば関節固定が必要となり、結果として筋肉萎縮や自己受容障害をもたらす恐れがある。本研究の目的は、重症血友病群と非血友病群 (対照群) を対象に、下肢の自己受容能および等尺性筋力を調べ、両群で比較検討することである。重症血友病患者 12 例 (血友病 A 11 例, 血友病 B 1 例) と対照群 12 例の人体測定的データをマッチさせ、両群の自己受容 (片脚立ち検査, 四肢の位置検査, 角度再現検査, 音叉検査) および等尺性筋力 (レッグプレス, 膝伸筋) を検査して両群の差を調べた。結果として、重症血友病群では片脚立ち検査 (堅いおよび軟らかい地面上で, 開眼および閉眼状態で実施; $p < 0.05$) で静的自己受容能が明らかに損なわれていることが示された (41 ~ 363%)。一方で、四肢の位置検査では両群の動的自己受容能に差は全くみられなかった。膝 (血友病患者で最も頻繁に障害がみられる関節) の局所的自己受容能検査 (角度再現検査) では、重症血友病群で機能障害がより高頻度にみられる傾向があったが、対照群と比べて明らかな差はなかった。量的知覚機能 (音叉検査) は、重症血友病群で有意に (9 ~ 10%, $p < 0.05$) 損なわれていた。さらに、重症血友病群

では脚伸筋の等尺性筋力が、片脚ずつ調べた場合も両脚を同時に調べた場合も、対照群に比べて劣っていた (32 ~ 38%, $p < 0.05$)。結論として、これらの結果は血友病患者では包括的自己受容能が損なわれており、脚伸筋の等尺性筋力が劣っていることを示している。したがって、これらの患者では自己受容能の低下を補うために、包括的自己受容能に焦点を当てたトレーニングが有用と考えられる。このトレーニングには、関節を至適安定状態にするための安全な筋力トレーニングも含まれるべきであるが、個々の患者のニーズと状況に合わせて調整する必要がある。

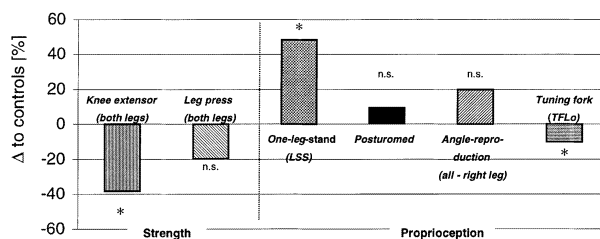


Fig. 5. Deficits of strength and proprioception in haemophiliacs. For further results see Tables 1-5. * $P < 0.05$ vs. controls; n.s., not significant; LSS, soft ground; TFLo, lower limb.